

0. はじめに

保安語積石山方言とは、中国の甘肅省臨夏回族自治州積石山保安族東郷族撒拉族自治州で話されているモンゴル系の言語である¹⁾。保安語積石山方言の人称代名詞は、主格形式を示せば、表1のようになる。

	単数	複数			
		村全体等の場合			
一人称	bu	buda 除外形	mangə 包括形	budala 除外形	mangəla 包括形
二人称	tei	ta		tala	
三人称	dzaŋ	dzaŋla			
	gaŋ	gaŋla			

表1からわかるように、保安語積石山方言には三人称代名詞として、単数を代表させ示すと、dzaŋ と gaŋ の二つがある。dzaŋ はモンゴル文語の ejen 「主」に対応し、gaŋ はモンゴル文語の irgen 「民」に対応する。

保安語積石山方言において dzaŋ と gaŋ が使えるのは、通例、(1)のように既に導入された第三者のことに言及するときである。これは、その第三者が談話の中で中心的な役割、つまりは談話主題を担うことを示すが、どちらの形式を使うかは話し手に委ねられているところがある。

(1) a. bu gudə dɔxədʒidə nəgə lolɔŋgələ kalo. **dzaŋ** nədə nəndzi kaldzo.

b. bu gudə dɔxədʒidə nəgə lolɔŋgələ kalo. **gaŋ** nədə nəndzi kaldzo.

「私は昨日大河家である老人と話した。彼は私にこう話した。」

本発表の目的は二つ。一つは、保安語積石山方言の二つの三人称代名詞 dzaŋ と gaŋ がどのような基準で使い分けられているのかを明らかにすることである。そして、もう一つはそれらが三人称代名詞として使われるようになった歴史的過程を明らかにすることである。二つの課題が相互に関わることは述べるまでもない。保安語積石山方言の資料は、筆者がフィールド調査によって収集した資料である。

1. 先行研究

保安語積石山方言の先駆的な研究としては、1950年代後半に保安語積石山方言を調査した Todaeva, B.X. (1964)がある²⁾。Todaeva, B.X. (1964:44, 48)は、保安語積石山方言の三人称代名詞として、ndžan、nggang と noge (複数: ndžase、nggangle と nogele)の三つを記している。ndžan と nggang は表1よりも古い形式を反映している³⁾が、noge を含め三つの使い分けについては述べていない⁴⁾。noge はモンゴル文語の nögüge 「他の」に対応する。

布和 劉照雄(1982)は、1964年の調査に1977年と1980年の調査を加えたものである。布和 劉照雄(1982:33-34)では、保安語積石山方言の三人称代名詞として、ndzaŋ 「彼/彼女」と ŋgaŋ 「別の、他の人」(複数は ndzasə と ŋgaŋlə)が記されている。そして、「ndzaŋ と ndzasə は通常の三人称代名詞であるが、ŋgaŋ と ŋgaŋlə は三人称代名詞を直接表すのではなく、漢語の別人、他人の意味に相当する」と述べ、ndzaŋ godzianə ūardziŋə moxlə dziŋ o. ŋgaŋnə ūardziŋə goldzi ginə. 「他は自分の事をいいかげんにしない。他の人の事に干渉しない」という例文を挙げている。

保安語には積石山方言のほかにも、青海省黄南藏族自治州同仁県で話されている同仁方言がある。保安語

1) 保安語積石山方言の話し手はイスラム教を信じる保安族。保安族の総人口は20,074人(2010年)であるが、保安語積石山方言の話者数はそれよりもかなり少なく、危機言語の一つである。保安語積石山方言には下位方言として大墩方言と甘河灘方言があるが、本発表は大墩方言に基づく。母音は7つ(a, i, u, e, o, ə, ə̃)、子音は25個(p, b, t, d, k, g, c, f, v, s, ʂ, c, χ, h, dz, tʂ, dz, tc, dz, m, n, ŋ, r, l, j)。

2) Todaeva, B.X. (1964)はキリル文字をローマ字に翻字して示す。

3) 語頭における子音連続の第一要素の鼻音と、dzaŋの複数接尾辞の二つが表1の形式よりも古い段階を表している。この点は、布和 劉照雄(1982)の形式も同様である。

4) nogə は「別の、他の」という意味を持ち、たとえば、nogə 1964 niandə rətə. 「他にもないこの人は1964年に来た」のように使われる。

が二つの地域で話されているのは、清朝同治年間(1860年代)、積石山方言の話し手の祖先が同仁県から移動してきたという歴史があるためである。

同仁方言の下位方言の一つ、年都乎を記述した陳乃雄編(1987)を見ると、積石山方言の *dzaŋ* と *gaŋ* に対応するのは *o/adzaŋ* 「三人称」と *agaŋ* 「他の人」となる。Fried, R.W.(2011)では、「三人称」として *atcaŋ* が記されているのみであり、「他の人」を表す形式は記されていない。別の下位方言である保安下庄を記述した Böke, Chen Nai Siyöng(1987)では、三人称代名詞として *ndzaŋ*、*ŋgaŋ*、*nogə* (複数は *ndzasə*、*ŋgaŋlə*、*nogələ*) の三つを記し、*ndzaŋ* を近称、*ŋgaŋ* と *nogə* を遠称と呼んでいる。ただし、この近称と遠称が具体的に何を意味しているのかについての説明はない。

歴史的視点から論じたものとして、Namčarai(1987)がある。この Namčarai(1987)はモンゴル系言語の代名詞について総括的に論じたものであり、保安語積石山方言の三人称代名詞についても論じている。それに従うと、*dzaŋ* と *gaŋ* の出自は指示代名詞であり、モンゴル文語で示せば順に *eden* 「これら」と *egün* 「この」になるが、根拠は無い。

2. 保安語積石山方言における *dzaŋ* と *gaŋ* の使い分け

保安語積石山方言の *dzaŋ* と *gaŋ* が既に導入された第三者を表すことについては、(1)で見たとおりである。そのほかにも、保安語積石山方言では指示代名詞で第三者を表すことができる。そのため、(1)において B が指示代名詞の遠称 *tə* を用い、*tə nadə nändzi kaldzo* 「彼は私にこう話した。」とすることはできる。しかし、眼前の人のことを言う場合、(2)のように、指示代名詞の遠称 *tə* を使うことはできても、*dzaŋ* と *gaŋ* を使うことはできない。

(2) *tə* / **dzaŋ* / **gaŋ* *bonan kuŋ i*. 「彼は保安人です。」

保安語積石山方言では、指示代名詞は他の言語がそうであるように内部照応でも外部照応でも使えるが、*dzaŋ* と *gaŋ* は内部照応でしか使えない。以下、保安語積石山方言の *dzaŋ* と *gaŋ* がどのように使い分けられているのか、談話を通じて見ていく。

2.1 *dzaŋ* と *gaŋ* のニュアンスの差

保安語積石山方言における *dzaŋ* と *gaŋ* は、確かに話し手と聞き手以外の第三者を表す。この点だけを見れば、両者に違いはない。ただし、*gaŋ* についてはあらかじめ述べておかなければならないことが二つある。その一つは前節にも述べた「他の人」にかかわることである。現在、保安語積石山方言では「他の人」という意味を表す場合、(3)のように *gaŋ* ではなく *gaŋ* の後ろに *-nə kuŋ* 「の人(属格+人)」を置いた *gaŋnə kuŋ* を用いる。*dzaŋnə kuŋ* という言い方は無い。

(3) *datc. gaŋnə kuŋ saɣədzo*. 「遅れた。他の人を待っている。」

もう一つは、(4)のような例である。*gora* 「雨」もしくは *asman* 「天」を敬うために、直接 *gora* 「雨」か *asman* 「天」と言うのを避けた忌避的な用法であろう。

(4) *gaŋ orsaŋ*. 「雨が降らなければと思っていたら、降り始めた。」

この(4)は老人層を中心に使われているものであり、保安語積石山方言から失われつつある。

では、*dzaŋ* と *gaŋ* のニュアンスの差を見ていこう。多くの場合、保安語積石山方言では *dzaŋ* と *gaŋ* どちらも使おうと思えば使うことができる。(1)を(5)として再掲する。

(5) a. *bu gudə daxədzið nəgə lolɔŋgalə kalo. dzaŋ nadə nändzi kaldzo.*

b. *bu gudə daxədzið nəgə lolɔŋgalə kalo. gaŋ nadə nändzi kaldzo.*

「私は昨日大河家である老人と話した。彼は私にこう話した。」

三人称代名詞として通常用いられるのは *gaŋ* である。一方、*dzaŋ* は排他的な意味を持つ三人称代名詞である⁵⁾。つまり、(5a)の *dzaŋ* は「他の人ではなく彼/彼女」という意味であり、(5b)の *gaŋ* は通常の「彼/彼女」である。(5b)が「彼は私にこう話した」という事実だけを表すとすれば、(5a)は、たとえば「こう

5) 二人称でこうした意味を持つと言えるのが *gənaŋ* である。この *gənaŋ* は、漢語からの借用語である再帰代名詞 *godzi* に再帰を表す *-naŋ* が付いた縮約形に由来するのであろう。次のように使われる。

abo: tci daxədzið sə jaŋgalə apədzi rədzi ginə? 「父：君は大河家で水をなぜ買って来ない。」

agu: gənaŋ nadə ser okədzi ginə. bə jaŋgalə apəgi? 「娘：自分が私にお金を渡さない。私がなぜ買う。」

的代名詞はなく、その役割を担うのは三人称代名詞の *dzaŋ* と *gaŋ* である。*bu dzigi* 「私は行く」というハキの発話を他者に伝えようとするとき、上に述べたニュアンスの差を別にすれば話し手は(12)のように *dzaŋ* も *gaŋ* も使うことができる。

- (12) a. *haki dzaŋ dzigi gædzi kaldzo*. 「ハキは彼(=ハキ)が行くとやっている。」
 b. *haki gaŋ dzigi gædzi kaldzo*. 「ハキは彼(=ハキ、ハキ以外)が行くとやっている。」

ただし、(12a)の *dzaŋ* は *haki* と同一人物でなければならないが、(12b)の *gaŋ* は既出の *haki* 以外の者であってもよい。つまり、*dzaŋ* は同定する対象は同一文内にあるが、*gaŋ* は同定する対象は当該文よりも前の文に現れていた他の者を表すこともできる。

このように *dzaŋ* は文を超える、超えないにかかわらず既出の第三者を受けることができるが、*gaŋ* は(埋め込み)文を超えないかぎり、既出の第三者を表すことはできない。

2.3 まとめ

以上を整理すると、表 2 のようになる。保安語積石山方言において *dzaŋ* は排他的な意味を持つ三人称代名詞であり、*gaŋ* は通常の三人称代名詞となる。

	<i>dzaŋ</i>	<i>gaŋ</i>
意味	・三人称 排他的な意味を持つ 「他の人ではなく彼/彼女」	・三人称 ・天(忌避的) (他の人= <i>gaŋnə kuŋ</i>)
照応	・文を超えなくて良い	・文を超える

3. 保安語積石山方言における *dzaŋ* と *gaŋ* の歴史

保安語積石山方言の *dzaŋ* と *gaŋ* がどのような過程を経て三人称代名詞にまで発展したのか、可能なところまで遡ることにしよう。モンゴル祖語に再構されている三人称代名詞は *i (複数 *a) であるが、これらの形式は保安語に継承されてはおらず、文献は無く消えたとしてもいつ消えたかはわからない。そうした点も踏まえ歴史を考えていく必要があるが、何よりも保安語内部での考察、つまりは保安語のもう一つの方言である同仁方言との比較考察が必要である。さらには保安語と歴史的に密接な関係にある他のモンゴル系諸言語、康家語、東郷語、土族語(互助方言、民和方言)、東部裕固語との比較を交えた考察も必要である。保安語はこれら 4 言語の中では康家語と東郷語との関係が深い。

3.1 他のモンゴル系諸言語との比較

保安語積石山方言の *gaŋ* と *dzaŋ* が三人称代名詞として使われるようになったのはいつであろうか。まず、同仁方言(年都乎)とどのような対応を示すのかを、「引用文中の 1 人称」と「再帰代名詞」も含め見てみよう。表 3 のようになる。

	積石山方言	同仁方言
三人称	<i>dzaŋ</i> 「他の人ではなく彼/彼女」 <i>gaŋ</i>	<i>o/adzaŋ</i>
他の人	<i>gaŋnə kuŋ</i>	<i>agaŋ</i>
引用文中の一人称(弁別的代名詞)	—	<i>oroŋ</i>
再帰代名詞	<i>godzi</i>	<i>goozi</i>

同仁方言の *o/adzaŋ* と *agaŋ* には、積石山方言のような特別な意味は無い。ただし、同仁方言には積石山方言には無い「引用文中の一人称」を表す専用の形式 *oroŋ* がある。この *oroŋ* は、モンゴル文語の再帰代名詞 *öber* 「自分」の属格形 *öberün* に対応するように、再帰代名詞として、保安語は漢語《各家》からの借用語(積石山方言 *godzi*、同仁方言 *goozi*)を使う以前、もともとはこの形式を使っていたと見てよい。とすると、歴史的には、同仁方言の方が保安語の古い段階を反映しており、表 3 の同仁方言の姿は音形式を除けば、保安語の前段階の姿を多かれ少なかれ反映していると言える⁶⁾。

6) 同仁方言の保安下庄では、*oroŋ* が意味の差など詳細は不明であるが、*bə* とともに一人称代名詞として用いられる。たとえば、*tə kuŋ oroŋdə kawolanə ɕgædzə*. 「その人は私に運転手を叩かせた」(陳乃雄編 1987:169)。「引用文中の一人称」が通常の一人称代名詞に変化したことになる。

そこで、次に保安語と歴史的に特に密接な関係にある康家語、東郷語との対応関係を見ておく。表4のようになる。保安語の前段階には、便宜上、同仁方言の形式を入れておく。康家語は斯欽朝克図(1999)、東郷語は布和(1986)による。

	保安語の前段階	康家語	東郷語
三人称	o/adzaŋ	uru	hə, tərə, əkən
他の人	agaŋ	ŋgɔ	
引用文中の一人称(弁別的代名詞)	oroŋ		oroŋ
再帰代名詞	goozi	gudʒa / gudʒa	godzia

保安語の前段階と康家語との間で並行性が認められるのは「他の人」と「再帰代名詞」である。康家語の三人称代名詞 *uru* はその専用形式であるが、モンゴル文語の再帰代名詞 *öber* 「自分」の属格形 *öberün* に対応する。もともと「引用文中の一人称」を表していたものが「三人称」へと変化したものと思われる。モンゴル文語 *ejen* 「主」に対応する康家語の形式は保安語のように「三人称」は表さず、*idzɔ* 「主人」である。

一方、東郷語の場合、保安語前段階との大きな違いは三人称代名詞にある。しかもその説明は、資料によって異なる。布和(1986)には表4の三つの形式について、意味の違いの説明はないが、通常第三者を表すのに用いられているのは指示代名詞遠称との兼用である、出自不明の *hə* である。*tərə* については、これがもともとの指示代名詞遠称であるが、劉照雄(1981:51)には不満あるいは卑下の意味を表し、那森柏(1988:117)には使用頻度が少なく、非敬意な意味を表すとある。*əkən* はモンゴル文語の *irgen* 「民」に対応するが、那森柏(1988:119-120)には非敬意な意味と、引用文中のもともとの発話者を表すという説明がある。モンゴル文語 *ejen* 「主」に対応する東郷語の形式は、*ədʒən* 「主」である。

このようにモンゴル文語 *ejen* 「主」に対応する形式を三人称代名詞として使うのは保安語だけである。この事実は、モンゴル文語 *ejen* 「主」に対応する形式が保安語で独自に三人称代名詞として使われるようになったことを物語る。その時期は、必然的に保安語積石山方言の話し手の祖先が同仁県から移動する清朝同治年間、1860年代より前となる。これを保安語の前段階と呼んでおく。一方、モンゴル文語の *irgen* 「民」に対応する形式が「他の人」という意味を持つようになったのは、後述する土族語の状況もあわせて考えると、保安語の前段階よりも前の段階となる。そして、それが三人称代名詞として使われるようになったのは保安語積石山方言においてと考えてよく、必然的に保安語積石山方言の話し手の祖先が同仁県から移動した清朝同治年間、1860年代以降となる。

土族語(互助方言と民和方言)と東部裕固語を見ると、違った見方もできるかもしれない。保朝魯 賈拉森編(1991:212-216)に従うと、土族語と東部裕固語では、チベット語アムド方言との接触により、モンゴル文語の *ejen* 「主」に対応する語の意味に変化が起きたことになる⁷⁾。確かに、チベット文語 *bdag* に対応するアムド方言の形式は「私、自己、主」を意味する。そして、土族語互助方言では *ndzeen* が「主」のほかにも、下位方言によって状況は異なるが、「本人」を表したり、「引用文中の一人称」を表したり、また *ndzeenaa* が「再帰代名詞」を表す。東部裕固語でも *edʒen* が「主」のほかにも、「引用文中の一人称」と「再帰代名詞」を表している。土族語民和方言でも「再帰代名詞」を表す。保安語もチベット語アムド方言の影響を強く受けており、同様の变化を経験した可能性が考えられるかもしれない。しかし、この場合、今三人称代名詞として使われている形式(積石山方言 *dzaŋ*、同仁方言 *o/adzaŋ*)がかつて「引用文中の一人称」か「再帰代名詞」として使われていたことになり、この見方はもともと保安語が使っていた「再帰代名詞」が *oroŋ* であることを考えると疑問である。

モンゴル文語の *irgen* 「民」に対応する形式についても、それを土族語では互助方言の場合も民和方言の場合も、下位方言によっては指示代名詞遠称とともに、あるいは専用形式として三人称代名詞に用いている。後者の例として民和方言を記述した Slater, K.W(2003)があり、*gan* という形式が記されている。しかし、土族語の状況は土族語内部でばらつきがあり、土族語内部で独自に起きたと考える方が自然である。

3.2 三人称代名詞へ

保安語積石山方言 *dzaŋ* は、保安語の前段階で起きた「主」から「三人称」への意味変化を反映しているが、この意味変化が起きた理由は何であろうか。今、保安語で「主」を表すのは、積石山方言も同仁方言も本来語ではなく借用語である。積石山方言は漢語からの借用語 *dzurin* (漢語《主人》)、同仁方言はチベット語アムド方言からの借用語 *daxo* が使われている。借用語が本来語を押しのかしたのかはわからないが、今のとこ

7) 保朝魯 賈拉森編(1991:215-216)は、土族語【互助方言】の *ndzeen* に「三人称」の意味があると記している。清格爾泰編 李克郁校閲(1991:195)を見ると、土族語互助方言の *ndzeen* は三人称尊称を表すという説明があり、それに従っているのだと思われるが、詳細は不明である。

ろよく分からない。ただ、「主」と「三人称」を繋ぐ意味として「物事の当事者」といったようなものを考えることはできる。そして、*dzaŋ* が談話の中でのみ使われ、眼前の指示対象には使えないと言うことは指示代名詞との間に棲み分けがあったことになり、眼前の第三者と談話の第三者との区別が保安語の前段階で必要であったとは言える。

一方、保安語積石山方言 *gaŋ* は古くから「他の人」という意味を持っており、清朝同治年間 1860 年代以降のある時期、三人称代名詞として使われるようになったと見てよい。談話の参加者である話し手と聞き手にとって、第三者は他の人にほかならない。その結果として、「他の人」を表す形式は *gaŋ* から *gaŋnə kuŋ* となり、他方で *dzaŋ* は押しのけられ、排他的な意味を持つ三人称代名詞に姿を変えたと思われる。こうした一連の変化は、かなり最近起きたものかもしれない。Todaeva, B.X. (1964) を見ても、三人称代名詞として *ndžan* を使った例文は多数見つかるが、*nggang* を使った例文を見つけることはできない。布和 劉照雄 (1982:33-34) にも、*ŋgaŋ* を通常の三人称代名詞として使うという説明は無い。

4. おわりに

保安語積石山方言の二つの三人称代名詞 *dzaŋ* と *gaŋ* について、それらの使い分けと歴史的過程を見てきた。表 5 のようにまとめることができる。

表 5

		保安語		
		前段階以前	前段階	積石山方言(1860年代以降)
<i>dzaŋ</i>	「主」		→ 「三人称」 ①	→ 「三人称・排他的な意味 (他の人ではなく彼/彼女)」
<i>gaŋ</i>	「民」	→ 「他の人」		→ 「三人称」 → <i>gaŋnə kuŋ</i> 「他の人」 ②

① この語がなぜ保安語において三人称代名詞になったのかは、今のところ明らかではない。ただし、「主」と「三人称」を繋ぐ意味として「物事の当事者」のようなものを想定はできる。

② かなり最近の変化

ただし、保安語の前段階以前の段階において、話し手と聞き手以外の第三者がどのような形式で表されていたのかは、わからない。

参考文献

- 保朝魯 賈拉森編(1991)『東部裕固語和蒙古語』内蒙古人民出版社
 布和(1986)『東郷語和蒙古語』内蒙古人民出版社
 Böke Chen Nai Siyöng(1987) *Bou an kelen-ü tongren ayalGun-u toyimu*, B. DavadaGba nayiraGulba, *MongGol kele sinjilegen-ü ögülel-üd*, 118-162, *Öbür mongGol-un arad-un keblel-ün qoriy-a*.
 布和 劉照雄(1982)『保安語簡志』民族出版社
 陳乃雄編(1987)『保安語和蒙古語』内蒙古人民出版社
 Fried, R.W(2011) *A grammar of Bao'an Tu, a Mongolic language of northwest China*, Umi Dissertation Publishing.
 劉照雄(1988)『東郷語簡志』民族出版社
 那森柏(1988)「東郷語蒙古語人称代詞比較研究」甘肅省民族事務委員会 西北民族学院西北民族研究所編『東郷語論集』102-125、甘肅民族出版社
 Namčarai(1987) *MongGol töröl kele-nügüd-ün beye-yin tölügen-ü üge-yin qaricaGulul*, B.DavadaGba nayiraGulba, *MongGol kele sinjilegen-ü ögülel-üd*, 14-87, *Öbür mongGol-un arad-un keblel-ün qoriy-a*.
 清格爾泰編 李克郁校閱(1991)『土族語和蒙古語』内蒙古人民出版社
 斯欽朝克因(1999)『康家語研究』上海遠東出版社
 Slater, K.W(2003) *A Grammar of Mangghuer: A Mongolic Language of China's Qinghai-Gansu Sprachbund*, Routledge
 Todaeva, B.X.(1964) *Baoanskij Jazyk*, Nauka.